

孤島の天才

遺伝子組換え

春日信彦

驚異的筋肉

もはや、レオタード姿のゆう子の動画や写真のアップは、瞬く間に世界中に広まっていった。それに伴い、剛士も人気者になっていた。学校内では、写真の売買は禁止されたが、ゆう子マニアには、マックで秘かに売買をしていた。県外のマニアへは、郵送までしていた。最近では、テニス部のパンチラ写真、水泳部の水着写真も人気が出始め、アクセス数は、あっという間に1000万件を突破していた。

テニス部では、若田部、水泳部では、児玉が特に人気があった。5月までは、ほとんどの部活を撮影していたが、6月に入り、ここ最近では、新体操部、テニス部、水泳部、をメインにカメラとビデオで撮影するようになっていた。火曜日は、テニス部を撮影する日で、野球グラウンドのホームから120メートルほど南側にあるテニスコートに、剛士はカメラとビデオと小さな折りたたみ椅子を持っていつものように歩いて行った。

テニスコートとグラウンドとのさかいに、危険防止のための10メートルほどの高いフェンスがあり、今まで野球ボールがテニスコートに落下したことはなかった。万が一、このフェンスをボールが越すとすれば、左バッターが右に引っ張って、大ファールを打った時ぐらいだが、そんなプロ野球選手みたいな野球部員は今までいなかった。剛士は、フェンスから20メートルほど離れた練習の邪魔にならない場所に小さな折りたたみ椅子を広げた。

いつも、写真撮影から始めていた剛士は、カメラを手にとると若田部を探した。糸島中学出身の若田部は、172センチの長身で、中学時代から全国的に有名で、福岡の名門Y高校やT高校から誘いがあったほどだが、それを断り糸島中学の篠田教頭の勧めで無名の糸島高校にやって来た。と言っても、部活の練習は火曜日だけで、そのほかの日は、3歳から通っている糸島ローンテニスクラブで練習していた。糸島高校は、篠田教頭の母校で、この策謀には、わけがあった。

現在、出生率から予測される少子化の対策の一環として、中学と高校を統合する計画が進められ、今後、糸島中学と糸島高校が統合されるという情報を、教頭は県会議員の父親からすでに手に入れていた。今までは、優秀な生徒は名門高校に進学させていたが、その情報を得てからは、今後は、学業やスポーツにおいて優秀な生徒を糸島高校に進学させ、糸島高校を名門高校にする計画を立てた。さらに、国会議員になった暁には、糸島大学を建立する青写真も描いていた。

野球部にも、糸島中学から100年に一人といわれる逸材が送り込まれていた。身長187センチ、体重105キロ、左の長距離バッター、賭布一矢（かけふかずや）、ニックネームは、モンスターと言うスラッガーだった。彼も多くの甲子園の常連校からオファーがあったが、篠田教頭が父親の知り合いの国会議員を使い、Y球団に手を回し、将来の入団を約束するとのことで、家族と本人を説得した。

当初は、甲子園出場を熱望していた家族と一矢は、糸島高校への進学を強く断った。そこで、教頭は、Y球団に契約金の一部として1000万円を手渡すように手を回し、さらに、入団するまでバッティングコーチを手配し、プロで通用するバッターになれるように育成するとの約束を交わさせた。秘かに契約金の一部を受け取った父親は、教頭とY球団を信じ、一矢を糸島高校に進学させた。

剛士は、3面あるコートが一番南側の第三コートでサーブの練習をしている若田部を見つけた。さっそく、若田部の後方に回り込み、うつ伏せになり、シャッターチャンスを待った。ちょうど、サーブを打ち終わって、前傾姿勢になるときが、パンチラのシャッターチャンスだった。剛士は、長い腕の左手先に包まれたボールをトスし始めてから、身体を反らし、後方にラケットを引く肢体をじっと見つめながら、インパクトの瞬間からフォロースルーまで数回シャッターを切った。

見事、パンチラを数枚ゲットした、と笑顔を作った瞬間、グラウンドから大きな声が沸きあがっていた。剛士は立ち上がり、グラウンドの方に目をやると、女子テニス部員のキャ〜と甲高い悲鳴が炸裂した。そのとき、剛士の目から火花が飛び散り、剛士は倒れた。剛士の頭にモンスターが打った大ファールのボールが直撃したのだった。剛士の頭は、石頭で怪我はなかったが、剛士は猛烈にムカついた。

心配になった野球部員の一人がコートに走ってやってきていたが、剛士は、ボールを拾うと、フェンスの外まで走り、そこから120メートルほど離れたホームを目掛けて「バカヤロ〜」と言い放ち、思いっきりボールを投げ返した。そのボールは、見事キャッチャーに捕球され、遠くにいた数人の部員たちがいっせいに大声を上げ、拍手した。「へたしたら、死ぬところだったんだぞ」と言って剛士は、若田部のビデオ撮影をするための準備に入っていたところ、今年、野球部にY球団からやって来たと言う衣笠コーチが、テニスコートのフェンスまでやってきて、剛士に声をかけた。

「お〜い、ちょっと話がある。こっちに来てくれ」コーチは、剛士を手招きした。いったい野球部のコーチが何の用事があるのかと思ったが、一応、フェンスの外にいるコーチのところにかけて行った。いってみると、野球部のみんなが君を呼んでいるから、ちょっと来て欲しいとの話であった。剛士は、ボールを打ち込んだことへの謝罪だと思い、笑顔で返事した。

「ボールが頭に当たったことでしたら、気にしていません。ここまで、打った選手に感心しました。うわさのモンスターでしょう。まったく気にしてないと伝えてください」剛士は、そう言って立ち去ろうとしたが、コーチは、大きな声で剛士に声をかけた。「待ってくれ。他にも、ちょっと話があるんだ。とにかく、来てくれ」コーチは、真剣な表情で剛士を見つめた。

剛士は、撮影のためにカメラとビデオをコートの上に置いていたが、すぐに話は終わると思いき、コーチの後ろについていった。すると、ホームベースの周りに立っていた野球部員たちが笑顔で出迎えてくれた。コーチは、剛士の左肩をポンと叩くと話し始めた。「君は、左利きだな。さっき、左手で投げ返してくれたね。すばらしいボールだった。あそこから見事ホームまで投げ返せるやつはそういない。君は、中学で野球をやっていたのか」剛士を取り囲んでいた部員たちは、黙ってコーチの話に耳を傾けていた。

剛士は、どんな話かと疑心暗鬼になり、ちょっとおびえていたが、そんなことかと分かり、笑顔で答えた。「僕は、姫島中学出身で、野球部はありませんでした。まったく、野球はやったことはありません。ルールもよく分かりません。できるスポーツは、水泳だけです」剛士は、元気よく、スポーツオンチであることを告白した。それを聞いていたコーチと部員たちは、目を丸くして、オ～、と叫んだ。

コーチは、腕組みをしては、大きく頷き、天を見上げ、さらに話を続けた。「しかし、さっきのボールは、すばらしかった。まったく野球をやったことがなくてあんなボールが投げられるものだろうか。本当は、やっていたんだろ～？」コーチは、剛士の言葉が信じられなかった。部員たちも同様に不思議がっていた。剛士は即座に答えた。「本当に、やったことはありません。一度もありません。姫島中学全生徒合わせても、たったの8名しかいないんです。野球もサッカーもまともにできないんです。テレビで見たことはあっても、やったことはありません。本当です」剛士は、これ以上恥じをかきたくなかった。

コーチは、頭をかしげ、剛士に訊ねた。「しかし、さっきのボールは、幻じゃない。どうして、あんなボールが投げられるんだ。信じられない筋力を持っている」剛士は、返事に困った。投げられたことに剛士も不思議に思っていたからだ。剛士は、思いつくことを話すことにした。「まあ、小さいころから舟をこいでいたから、足腰は強いと思います。でも、本当に野球はやったことはありません。さっきのはまぐれです」剛士は、嘘を言っていると思われる、悲しくなってしまった。実は、剛士は、遺伝子組換え人間だったが、そのことは、両親から知らされていなかった。

コーチは、笑顔で頷き、納得した顔で部員を見渡した。部員たちも納得した顔で頷いた。「分かった。とにかく、投げてくれ」コーチは、剛士にボールを手渡した。剛士は、いったい何のことかわけが分からなかった。「投げるって、どこにですか？」剛士は問い返した。コーチと部員たちは、大声で笑うと、キャッチャーの安倍が、ミットに右手を突っ込み、ホームに腰を下ろした。「俺に、投げろ。思いっきりだぞ。全力で投げろ。いいな」どこから投げればいいのか分からない剛士は、きよとんとコーチを見つめた。

3年生ピッチャーの金田は、剛士をマウンドに連れて行くと声をかけた。「ここから、ミット目がけて全力で投げろ。さあ」部員たちは、固唾を吞んで剛士を見つめていた。剛士は、どんなフォームで投げていいか分からなかったが、テレビで見ていたピッチャーのフォームを思い出して思いっきり投げた。ボールは、ピッチャーの頭上2メートルのところを弾丸のように突っ走っていった。

ワ〜といっせいに歓声が上がった。ボールはとんでもないところに飛んでいったが、スピードは、150キロを超えていた。それを見届けたコーチは、大きな声で叫んだ。「こいつで行こう」コーチと部員たちは、頷き剛士のところに駆け寄って行った。「お前ならやれる。そうだな、みんな」コーチはみんなの同意を求めた。部員たちは、頷き、笑顔で承諾した。剛士は、いったい部員たちはなにを喜んでいるのだろうと、不審に思った。

「いったい、どういうことですか。野球部に入れと？」剛士は、ムカついた顔で大声を出した。「そうだ、野球部に入ってくれ」コーチは即座に返事した。剛士は、はらわたが煮えたぎる思いであったが、じっとこらえて、静かに返事した。「申し訳ありませんが、僕は、写真部に所属しています。野球部に転部する気持ちはまったくありません。野球をしたいという気持ちもまったくありません」剛士は、頭を下げて、踝を返した。

コーチは、即座に声をかけ剛士の肩に手を置いた。「悪かった。勝手なことを言って。今じゃなくて言い、一度考えてくれないか。今、エースピッチャーがいないんだ。頼む、この通りだ」コーチは、両手をあわせ頭を下げた。モンスターが熊のように歩きより、「俺からも頼む。頭、痛くネ〜か？」モンスターは、剛士の頭をそっとなでた。剛士は、どんなに頼まれても野球をする気はないと口元まで出かかっていたが、軽くかわして立ち去った。

部員たちは、落胆し、コーチも天を仰いだが、頑なな剛士の後姿をじっと眺めて、引き止めることはしなかった。コーチは、たとえ土下座してお願いしても、うんとは言わないやつだと直感していた。コーチは、剛士をうんと言わせる秘策をじっくり練ることにした。剛士は、コートに戻り、いつものように若田部のビデオ撮影を始めた。頭にボールが直撃し、野球部に入れと誘われ、頭はカッカきいていたが、若田部のはりのあるウチモモがアップで目の前に現れると、ハ〜ハ〜と興奮してしまい、いつものように股間が盛りあがった。

孤島の天才

久しぶりに仲良し三人組は、ゆう子家でだべることになった。12時に予約していたピザクックのピザが配達され、彼女たちは手際よく昼食の準備を始めた。ジュース、チキン、フライドポテト、ピザを各自の小皿にとって、グラスにジュースを注ぐと、グラスを手に取り、乾杯の明るい声が響き渡った。今日の集合をかけたのは、横山だった。今日の話題は、ゆう子のグラドルデビューだった。

ゆう子の写真は、剛士が流したネットで全国に広まっていたが、それを見ていたのは、中学生、高校生だけではなく、芸能関係者も物色していた。グラビア写真を専門とする事務所が、ゆう子に目をつけ、さっそく、新体操の妖精を口説き落とそうと、東京から糸島高校まで飛んでくると、さらに、説得のため自宅まで押しかけてきた。唐突のことで、家族は、疑心暗鬼で躊躇したが、事務所の執拗な説得に押されて、ゆう子はグラドルになる決意をした。

八神が満面の笑みでゆう子にお祝いの言葉をかけた。「おめでとう。ゆう子、やったね。一躍、アイドルか。もう、あちこちの雑誌にゆう子の写真が出てるよ。一気に、金持ちジャン」ゆう子は、眼を大きく見開いて、右手を顔の前でひらひらと振った。「何、言ってるの。たいしたことないんだから。こんなの、一時的よ。すぐに、消えちゃうんだから。あまり、大げさにしないでよ」ゆう子は、学校でも話題になっていることが、少しいやになっていた。

横山は、ゆう子をネットで流した写真部の男子に興味があった。「ところで、どんな男子？ゆう子をネットで流してる写真部の男子って？」口に入る寸前のピザが突然止まり、ゆう子の目が釣りあがった。ピザを小皿に戻し、変顔で話し始めた。「それが、ちょっとキモイのよ。一度、ストーカーにあったんだから。その子、鳥羽って言うんだけど、四角い顔で、ネクラで、股間の写真ばっか、撮ってるの」話し終えたゆう子は、ピザを手に取り、大きな口に押し込んだ。

八神は、ジュースを一口すすり、一度頷き、話し始めた。「でも、そのキモイ男子のおかげで、グラドルになれたわけだから、感謝しなくっちゃ。鳥羽君、ゆう子のこと好きなんじゃない。まあ、ゆう子は、アイドルだし、世界中の男子は、ゆう子の写真で、あれをやってるだろうしね」八神は、オナペットをほのめかしていた。ゆう子は、あれ、と聞いてピンとこなかった。

「あれ、ってなによ？」ゆう子は、マジに訊ねた。横山は、プツと噴出し、下を向いた。「横山、なによ。どういうこと？」あきれた八神は、前かがみになってささやいた。「オナニー」ゆう子は、真っ赤になった。横山は、大きな声で笑い出した。「いいじゃない。世界中の男子に愛されて」横山と八神は、そろってハハハと笑い声を上げた。真っ赤になったゆう子は、俯いてしまった。学校でも、こんなことが話題になっているかと思うと、いたたまれなくなった。

横山は、ゆう子を傷つけてしまったのではないかと思い、四角い顔の話をすることにした。「ゆう子、鳥羽君って、数学の天才らしいわよ。うちの数学の先生が、糸島のド田舎に天才がいるって、騒いでいるの。知ってる？5月にあった全国共通模試の数学で満点取ったのは、全国で3人。東京のK高校、兵庫のN高校、福岡の糸島高校。今回の問題の一つに数学オリンピックの問題があったんだって。だから、まさに、天才ってこと」横山は、鳥羽を褒め、優秀な男子に好かれていることを強調し、ゆう子の機嫌をとった。

八神は、信じられない顔で、冗談を言った。「ストーカーが数学の天才。こりゃ〜すげ〜ジャン」八神は、チキンを口に押し込んだ。ゆう子は、鳥羽の話題は避けたかったが、心の底では、彼のおかげでグラドルになれたことに感謝していた。「鳥羽君ね、姫島中学の出身なの。あんな孤島でどうやって勉強してたんだろうね。不思議よね」ゆう子は、塾もない孤島での学校生活が想像できなかった。

横山も頷き、怪訝な顔で話し始めた。「確かに、ゆう子の言う通り。K高校もN高校も中高一貫で、超名門じゃない。しかも、数学オリンピックの常連校でしょ。それと比べ、鳥羽君、塾もない、寂しい孤島で、どうやって勉強してたんだろ～」横山も、不思議でならなかった。八神は、身乗り出すと、場違いなドヤ顔で、話し始めた。「きっと、四角い顔には、秘密めいたものがあると思うな。探れば、何か出てくるぞ」ゆう子と横山は、顔を見合わせた。

横山は、大きく頷いた。「なるほど。確かに、何かあるわね。あんな孤島に数学の天才がいるわけがない。きっと、お父さんは、漁師じゃなく、数学者か医者じゃないかしら。ある事件で、東京から誰にも分からない孤島に逃げてきたんじゃないかしら。もしかしたら、革命家かも？」ゆう子は、マジになって聞きいていた。話し終えた横山を見つめ、大きく頷いた。八神は、ますます、調子に乗ってきた。

「そうよ、横山の言う通り。何か秘密があるな。ゆう子、その四角い顔、探りなよ。面白くなってきたじゃない」八神は、詮索好きで、中学校のときには、教頭と新任教師の逢瀬を暴いたことがあった。だが、そのとき、真夜中に張り込みをやったために、あわや、警察に補導されそうになった。「また始まった。探偵ごっこは、もうこりごりよ。あのときのこと、憶えてるでしょ」ゆう子は、ジュースをチュ～と吸い込んだ。

横山は、指揮者のように人差し指と親指で挟んだフライポテトを、左右にヒュヒュと振って、もっともらしく話した。「そうね、父親は、チェ・ゲバラかも」八神とゆう子は、初めて聞く言葉に顔をゆがめた。「チェ・ゲバラって？」八神は訊ねた。一瞬あきれた顔をした横山は答えた。「知らないの、医者で革命家のチェ・ゲバラ。キューバ革命のチェ・ゲバラじゃない。ほんと、二人ともバカなんだから。もうちょっと、勉強しなよ」二人は、馬鹿にされて、しょげてしまった。

ゆう子は、いったいどういう意味か分からなかったが、恥をしのいで訊ねた。「その、革命家と鳥羽君のお父さんが知り合ってたこと？」横山は、あきれて返事もできないほどだったが、バカに説明することにした。「チェ・ゲバラは、CIAに射殺されて、この世にはいないの。もしかしたら、鳥羽君のお父さんも、医者で革命家だったかも知れないって思ったのよ。そして、あるとき、CIAに暗殺されそうになったから、孤島の姫島に身を隠したんじゃないかしら。単なる、憶測だけど」横山は、どうしようもないバカに適当な話をした。

真に受けた八神は、顔を真っ赤にして、大きな声で話し始めた。「そうよ、きっと、そうだよ。鳥羽のお父さんは、革命家で、CIAから逃れるために孤島にやって来たのよ。きっとそうだよ。ゆう子はどう思う？」ゆう子は、あまりにも根拠のない話についていけなかった。「ちょっとまってよ、そんなの、単なる妄想じゃない。鳥羽君は、きっと勉強家なのよ。塾に行かなくても、一人で頑張っていたのよ。お父さんのことは分からないけど」鳥羽は漁師の子で、ただ真面目な男子としか思えなかった。

八神の好奇心は、核爆発のきのこ雲のように、一気に天までつきあがった。「ゆう子、とにかく探るのよ。鳥羽は、只者じゃない。きっと、秘密があるに決まってる。横山の憶測は当たっているよ」八神の口から飛び出した唾は、ゆう子の顔に飛び掛っていた。いったん興奮すると八神は、押さえが聞かなかった。「八神、もうやめてよ。鳥羽とは、何の関係もないんだから。もう、この話はよそう」ゆう子は、横山に同意を求めて、目配せをした。

横山も八神の猪突猛進には辟易していたが、鳥羽の秘密にも興味があった。「う～ん、におうわね。何かあると思う。あんな孤島に数学の天才がいるってのも、不思議な話よ。この際、ゆう子、探ってみなよ」ゆう子は、目を丸くして、何と言っていいか分からなくなった。まさか、横山までが、探偵ごっこに頭を突っ込むとは以外だった。「ちょっと、二人とも、たいがいにしてよ。探るって、どうすんのさ。根掘り葉掘り、家族のことを聞き出せって言うの？そんなのいやよ」ゆう子は、残りのジュースを一気に飲み干した。

ムカついたゆう子に驚いた八神は、テーブルをポンと左手で叩いた。「まかして。姫島に行って、聞き込みをやってくる。きっと、なにかあるから」ドヤ顔の八神は、ゆっくりと二人に顔を振った。あまりにも、大胆な行動に出た八神が心配になり、横山が口を挟んだ。「八神、そう、ムキにならなくていいじゃない。さっきのは、単なる想像よ。鳥羽のお父さんの詮索は、もうよそう」横山は、冗談で話したつもりが、收拾がつかなくなってしまい、話さなければよかったと思った。

ドヤ顔の八神は、腕組みをすると、立ち上がった。「諸君、心配なされるな」もはや、八神を制する手立てはなかった。ゆう子は、話を変えて、八神の頭を冷やす作戦に出た。「やがみ、分かったから、落ち着きなさいよ。そのことは、八神に任せるとして、一年の倉持から聞いた話なんだけど、鳥羽君、野球部から誘われてるんだって。中学のとき、野球部だったのかな〜？」ゆう子は、とぼけた顔でフライドポテトを右手の指先でつまんだ。

そのとき、玄関のドアが開く音がした。母親、陽子が出先から戻ってきた。「ただいま〜」陽子は、キッチンを覗き込み笑顔で声をかけた。「みんな、元気そうじゃない。ほら、メロンにマンゴーにサクランボ、さあ、食べましょう」3人は立ち上がり、手分けしてデザート準備に取り掛かった。陽子が、チラッと横山の体型を見てつぶやいた。「横山さん、ちょっと太ったみたいね。カロリーのとり過ぎじゃない。寮生活を満喫してるみたいね」横山は、体型のことを言われ、落ち込んだ。

ゆう子が、即座に言葉を挟んだ。「ママ、部活のせいよ。ポーリングって、足腰が強くなるのよ。ね〜横山」横山は、確かにそうだったが、太り気味な体型を気にしていた。「みんな、食べましょう。ホント、おいしそうだわ」陽子は、みんなに声をかけ、飛び乗るように腰掛けた。全員腰掛けると、陽子が、無神経な話を始めた。「八神焼肉飯店、儲かってしょうがないんじゃない、ついさっき、ベンツに乗ってるお父さん見かけたわよ。そう、ゆう子の誕生日、そちらでやろうかしら」

八神は、母親の毒舌がまた始まったかと思い、適当に返事した。「いらしてください。お母様のために、最高のお肉を用意しておきます。あら、お母様、肌が、輝いていらっしゃいますね。何か、いいことでも」八神は、商売と思い、お世辞を並べた。陽子は、褒められると、とたんに機嫌がよくなった。「ほら、ゆう子が、グラドルになったじゃない。ちょっと、鼻が高いのよね。私に似て、可愛いのよね」ゆう子は、穴があったら今すぐにでも飛び込みたい気持ちだった。「ママ、グラドルのこと、あちこちで話さないでよ。一時的なんだから」八神は、さらに、余計なお世辞を並べ始めた。

「お母様も、若いころは、アイドルじゃありませんでしたか。お母様だったら、すぐにでも、グラドルになれますわ。トシマAKBってのが、あったような」八神は、ちょっと口が滑った。トシマと聞いてムカついた陽子は、愚痴を言い始めた。「ゆう子が、オリンピックをあきらめさせしなかったら、もう、夢はきれいさっぱり消えちゃったわ。八神さんは、歌手を目指してるんでしょ。どう」突然振られた八神は、メロンを食べてた口が止まった。

「は～、レッスンには、いってるんですが、どうも、いまひとつ、パツとしないんです。でも、いつかきっと」八神は、自信を失いかけていたが、シンガーソングライターを止めるつもりはなかった。「横山さんは、前途有望ね。T大を卒業して、裁判官の道を歩むのね。うらやましいわ」陽子の愚痴は、ゆう子がオリンピックをあきらめたころからひどくなっていた。「お母さん、ゆう子は、立派な夢を追いかけているじゃないですか。子供たちに体操を教えると言う。すばらしいことだと思います」横山は、笑顔でゆう子を見つめた。

ゆう子の心は、曇り空だった。勇樹がいなくなった今、自分の夢が見えなくなっていたからだ。もう一度、オリンピックを目指すべきか、最近悩むようになっていた。ゆう子は、うつむいてマンゴーをかじっていた。横目でチラッとゆう子を見た陽子は、ポンと両手を合わせると、二階にかけていった。しばらくして、ゆう子のために去年から飼いはじめたチワワを抱えて下りて来た。「ほら、可愛いでしょ。ファイトって言うの」みんなは、ファイトに駆け寄っていった。

争奪戦

コーチは、出会うたびに何度か勇樹に声をかけたが、勇樹は、顔を立てには振らなかった。最近では、ちょっとでもコーチの姿が見えると、勇樹は即座に踝を返し、逃げ去っていた。中村監督は、コーチの執拗さにあきれていた。なぜ、そこまで勇樹を必要とするのか意味が分からなかった。たとえ、ボールにスピードがあっても、野球をやったことがないものが、一年やそこらで、ストライクが取れるようになるとは到底信じられなかったからだ。

練習試合が始まると、コーチはいつものように監督にぼやき始めた。「監督、どうとかならんもんですか。とにかく、もったいない。勇樹は、ものになる。私の目には狂いはありません。ウ～」監督は、またかと苦虫をかんだような顔で返事した。「コーチ、気持ちは分かりますが、ボールが速いだけじゃ、使えない。ストライクが取れるようになるには、一年やそこらではむりじゃないですか。しかも、野球をまともにやったこともないド素人じゃ」いつものように、否定的意見を述べた。

コーチは、いつものように反論した。「確かに、一般論はそうでしょう。でも、勇樹は、天才じゃないでしょうか？数学の天才は、野球の天才でもあるかもしれません。彼の、筋力は、日本人離れしてます。彼は、ハーフじゃないですかね～。とにかく、筋肉が違いますよ。手足も長いし、指も長い。何と言っても、性格が強そうじゃないですか。きっと、プレッシャーに強いと思います。監督は、どう思います？」コーチは、勇樹を天才扱いした。

監督は、腕組みをして、コントロールの悪い2年生の山本に大きな声で罵声を浴びせた。「バカヤロー、そんなんじゃ、初戦、敗退だぞ。気合入れてやれ」コーチも今のままでは、初戦敗退と予測していた。あまりにもピッチャーが悪すぎた。それかと言って、一年生にこれと言った素質のあるピッチャーはいなかった。コーチは、少なくとも県大会には出場したかった。

球団からは、モンスターだけ育てるよう指示を受けていたが、コーチをやっていると、どうしても甲子園に行きたくなってしまった。「勇樹が投げてくれれば、甲子園も夢じゃないんだが。勇樹のやつ」監督は、大声で笑った。「コーチ、甲子園より、初戦突破だよ。勇樹のことは、さっさと忘れて、今のチームを鍛えなければ。モンスターの一発が、ここ一番で出るといいのだが」監督は、モンスターのホームランに期待していた。

コーチは、平然とした顔で答えた。「監督、モンスターの一発は、間違いありません。でも、モンスターが一点取っても、試合は負けです。あんなピッチャーじゃ、5点は覚悟しなきゃならんでしょうな」監督も、目じりを下げて、頷いた。「でも、現実には、今の力で戦わなければなりません。しかし、ピッチャーが欲しいもんですな」監督の本心は、一点で抑えられるピッチャーが欲しかった。心の底では、勇樹がエースとなり、県大会に出場できないかと思ってみたが、そんな馬鹿な、と顔を激しく振り、妄想を振り払った。

コーチは、監督の気持ちが痛いほど分かっていた。高校の監督で甲子園に出なくてもいいなどと思っている監督は一人もいない。どの監督も、一生に一度は出たいと思っている。コーチは、監督の横顔を見つめ、気合のこもった声で、叫んだ。「任してください。必ず、勇樹を連れてきます」監督は、もしかすると思っただけだったが、顔をしかめただけだった。今年も、初戦敗退か、と心でつぶやき、寂しそうに腰を上げた。

コーチは、殺風景な自宅のマンションに帰り、缶ビールを一本飲み干すと、6畳間の畳の真ん中で座禅を組んだ。静かに心を落ち着け、名案が浮かぶのをじっと待った。30分ほどすると、スマホが鳴った。東京にいる娘の真白からのメールだった。「お父さん、ちゃんとお飯食べてる？田舎は、いいでしょ。お父さんには、ぴったりじゃない。おいしい空気をたくさん吸って、元気で帰ってきてよ」コーチは、読み終わると、ひらめいた。

彼女だ。そうだ、バカだな～、こんなことに気付かないとは。コーチは、心でつぶやいた。勇樹は、部活の写真を撮っては、大島の写真をネットに流している。つまり、勇樹も大島のファン。大島が、頼めばきつと入部するのでは。だが、大島がそんなことを引き受けてくれるだろうか、と思いが行き詰った。大島は、先輩だし、勇樹とは話したこともないはず。どうすれば・・・コーチはしばらく座禅のまま考え込んだ。

コーチは、勇樹のことを考え続けた。ところが、勇樹のことを何にも知らないことに気付いた。強引な勧誘のことばかり考え、勇樹の両親のことも、交友関係も、本人の夢も知らなかった。拳骨を作ると、頭をゴツンと叩いた。コーチは、自分のおろかさに始めて気付いた。コーチは、プロしか育成したことがなかった。つまり、技術的指導はやったことがあったが、選手の心を育成したことがなかった。

どんなに身体的能力があっても、野球への情熱がなければ、野球をやることも試合で勝つこともできないことに改めて気付かされた。まったく、当然のことであつたが、そのことをいつの間にか忘れていた。高校生のコーチとしては、失格であることに気づき、全身の力が抜け落ちた。コーチは、思いをめぐらした。監督は、一人で、舞い上がっている自分を笑っていたに違いない。この子達はプロじゃない、素質のない野球少年に過ぎないと。まして、勇樹は野球少年でもなく、野球に情熱を持ってもないと。

プロ野球選手として名声を得たことで傲慢になっていたコーチは、監督に謝ることにした。翌日、監督に椅子を差し出し、改めて話しをした。「監督、まったくおろかでした。気を悪くされていたでしょう。私は、プロしかコーチしたことがなく、アマチュアは初めてです。思い上がっていました。何と云っていいか。お恥ずかしい限りです」コーチは、監督に頭を下げた。監督は、まさか頭を下げるとは、夢にも思っていなかった。

確かに、コーチにはムカついていた。プロを気取っている姿が鼻について、嫌気を差していたが、モンスターの存在は大きく、じっと我慢していた。心では、いつもぶつぶつささやいていた。素質のない子供たちを育成することは、プロを教えるより何倍も大変なんだと。今にも辞めようとしている選手もいれば、甲子園に出たいと願っている生徒もいる。こんな子供達を、引っ張っていくことがどんなに大変なことか。

監督は、コーチのすごさに感服した。プロにしか教えたことがないコーチが、こんなに短期間で、アマチュアを教えることにおいて自分の未熟さを自覚されたことに。「頭を上げてください。こんな田舎侍に頭を下げられては、天下のY球団に申し訳ありません。スーパースラッガーをこんな無名の高校に送り込んでいただき、感謝しております。ただ、剛士のことはあきらめましょう。彼には、彼の夢があるはずです。それでいいじゃないですか」監督は、今の弱小チームを鍛えることに生きがいを感じていた。

コーチは、晴れ渡った青空に流れる真っ白い雲を眺めていた。カーンと響き渡る快音を聞くとつぶやいた。「ごもつとも、どうかしてました。でも、妖精が一言お願いしてくれたら、入部してくれたかもしれないと思うと、残念ですな」監督は、妖精と聞いて、いったい誰のことを言っているのだろうと訊ねた。「妖精って、誰のことですか？」眉間にしわを寄せて訊ねた監督に、コーチは冗談のように答えた。

「いや、ほら、わが校のアイドルですよ。大島のことです」監督は、大島と聞いて、顔が引きつった。昨年、急死した勇樹のことを思い出したからだ。暗い顔をした監督を見たコーチは、何か悪いことでも行ったのかと不安になった。「監督、冗談ですよ。ワハハハ」コーチは、立ち上がり、モンスターに声をかけた。「おい、調子が悪いのか。ボールを振ってどうする」セカンドフライを打ったモンスターにムカついて怒鳴った。

三年経つとモンスターと共に去っていくコーチに親しみが湧かなかったが、心の温かさを感じた監督は、大島のことを話す気になった。「大島だが、みんなからちやほやされて、何の悩みもないように見えるけど、誰にも言えない深い傷を抱えて頑張っているんです」コーチは、ちょっと暗い話にどのように返事していいか戸惑った。「私は、今年の4月にやって来たばかりだから、この学校のことはよく分からないんだ。大島に何かあったんですか？」コーチは、腰掛け、監督の横顔をそっと見つめた。

監督は、大きく深呼吸しながら、遠くをぼ～と眺めた。「大島は、去年の12月に東京の新体操の名門W高校から郷里の糸島高校に転校してきましてね、その理由は、誰にも話していないのです。今一人でじっと我慢していることでしょうか」監督は、大きくため息をついた。コーチは、以前から大島のことを不思議がっていた。どうして天才アスリートが、無名の高校にいるのか。「家庭の事情でもあったのですか？」よくある、経済的理由で転校したのではないかと考えた。

監督は、しばらく黙っていたが、校長から聞いた理由を話すことにした。「表向きの話では、オリンピックの夢をあきらめて、学校の先生になりたいくて、転校してきたらしいです」コーチは、表向きの、と聞いて問い返した。「それじゃ、本当の理由は何ですか？」監督は、言うべきか、いわざるべきか、迷った。親友、太の顔がちらっと脳裏に浮かんだとき、話す決意をした。勇樹が存在したことを誰かに話したい衝動に駆られた。

「今から話すことは、私の憶測です。聞き流してください。私の学生時代からの親友に菊池と言うのがいます。その息子の勇樹は、子供のころから野球が好きで、父親と同じ投手の道を歩きました。素質もあって、幸運にも、大分の名門Y高校に進学できました。でも、神様は、いるのでしょうか？勇樹は、骨肉腫に侵されてしまったのです。勇樹は、治療のためQ大病院に入院しました。それを知った大島は、勇樹を看病するために郷里に戻ろうと必死に自分と戦い、やっとの思いで郷里に戻ってきました。でも、神は惨いじゃありませんか。大島が、戻ってくる日に、勇樹は天国に旅だったのです」監督は、自分の憶測を静かに話し終えた。

コーチは、あまりにも不幸な話に一言も言えなくなってしまった。「いや、湿っぽくなっちゃった。これは、単なる憶測です。勇樹のピッチングを思い出すと、つい、馬鹿なことをしゃべってしまって。もし、勇樹がこのマウンドにいてくれたら、甲子園も夢じゃなかったかも、いいボール、投げてました」コーチは、亡くなった勇樹と言う少年に興味が湧いてきた。今はいないとしても、この田舎にすばらしい投手がいたことに感銘した。

「誠に不幸な話です。きっと、勇樹君は、天国から中村監督率いる野球部を見守ってくれていることでしょう。監督、勇樹君の分まで頑張らなくては。本当のことを言うと、こんな田舎に飛ばされて、がっかりしていたんです。でも、監督と出会えて、プロの世界では味わえない貴重な何かをいただいたように思います。一緒に、甲子園目指して頑張りましょう」監督は、引きつるような表情で頷いた。

コーチが、サッカーグラウンドのほうに目をやると、サッカー部の中村監督が、喜色満面でお腹を揺らしながらやって来た。「や～、どうだ。野球部はいいよな～。大物が入って、サッカー部はさっぱりだ。でも、今日、天運と言うのか、まあ、サッカーの授業でな、どえらいキック力のあるやつを発見した。そいつ、ゴールキーパーをやりたいと言うから、やらせたんだが、なんと、ゴールから蹴ったボールが、相手のゴールを超えたんだよ。そんなの、始めてみた。こいつが入れば、鬼に金棒だよ」コーチと中村監督は、あっけにとられ、二人は顔を見合わせた。

コーチは、大きく目を見開き、口を尖らせて、訊ねた。「もしかして、鳥羽ですか？」中田監督は、身を引き、つぶやいた。「どうして分かりましたか？」中村監督が、クスクス笑い始めた。「いや、鳥羽の筋力は、並みじゃありません。この前ちょっと、ボールを投げさせたんですよ。すると、150キロを超える剛速球を投げましたよ。あいつ、まさに天才です。是非、野球部に入らないかと言ってみたところ、即座に断られましたけどね」中村監督は、またワハハと笑った。

ニヤッと微笑んだ中田監督は、ドヤ顔で話し始めた。「そうか、そうだろう。鳥羽は、サッカー部に入りたいと言うことだ。鳥羽は、もらった。だが、陸上部の宇佐美監督があきらめてくれるかだ？う～」中田監督は、腕組みをして、うなりながら立ち去っていった。いったんあきらめていたコーチであったが、鳥羽がサッカー部を取られると知ると、ムカついてきた。鳥羽は、写真部からどこにも転部しないと思っていたからだ。

出生の秘密

鳥羽の母親、麻美は、剛士が5歳のとき失踪したことになっている。麻美は、失踪する前に親友のルミ子に手紙を送っていた。そこには、ルミ子には理解しがたい内容が書かれてあった。手紙には、次のようなことが書かれてあった。

反原発デモがきっかけで、私のためなら命をも捨ててもいいと言う、私にはもったいないような革命家の剛一と幸運にも結婚できました。でも、なぜか、二人の間には子供ができませんでした。それでも幸せでしたが、剛一は自分に原因があることを知っていたみたいで、精子をもらって、子供を作ることを提案しました。私は、死ぬほど悩みました。愛してもいない人の精子で子供を産んで、幸せになれるのかと。結局、私は、剛一の愛を信じ、子供をやどしました。

あるとき、ベッドに横になっていた私の耳元で、そっと、剛一はささやきました。「人類を救う革命家を産んでくれ」そのとき、その意味は、よく分かりませんでした。その後、妊娠は順調で、立派な男の子が誕生しました。剛士が5歳の誕生日、あのときのように、剛一がそっと私の耳元でつぶやいたのです。「この子は、遺伝子組換えの革命家だ」と。

そのときは、冗談を言っているんだろうと思っていましたが、遺伝子工学について調べていくうち、植物や動物だけでなく人間の遺伝子組換えの研究がなされていることを知りました。後日、剛一が言ったことを笑って否定してくださると思い、担当医だった安部先生に確認したところ、暗い影を残し、無言で立ち去りました。先生の後姿が意味することは、即座に理解できました。もう、頭が真っ白になり、死にたい気持ちで神に祈りました。神を冒瀆してしまった私が、剛士を守るためにできることは、剛士の罪と一緒に背負い、神の許しを請うことしか頭に浮かびませんでした。

ルミ子との思い出は、文字にあらわすことはできない。手が震え、涙で文字も見えない。ルミ子、許してくれるわね。さようなら、親愛なるルミ子。

孤島の天才

<http://p.booklog.jp/book/86864>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/86864>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/86864>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ